

《気軽に行けるフランス》

ルフランソワ氏も講師として働いている九州日仏学館は、全国でも東京、京都、福岡の3箇所にはありません。「日本文化とフランス文化の交流と促進」というコンセプトでフランスの外務省が運営しています。フランス語教室に加えて、映画、雑誌を好きなきに鑑賞できるメディアアーツもあります。さらにワインやフランス料理を紹介するイベント、最新の思想や研究についての講演会、フランスゆかりのアーティストによる展示会なども頻りに開催されています。この場所に行くと生活の質が数段、良くなった気がするのはフランス文化の奥深さでしょうか。

《フランスの芸術環境》

フランスはいつの時代もアーティストを惹きつけてやみません。その秘密はなんでしょうか？九州日仏学館館長のジャン・ジャック・ガルニエ氏に話をうかがいました。

—若いアーティストを取り巻く環境について教えてください。

館長 「フランスは表現の自由、寛容、

革新、挑戦そして文化の国です。それは、若い才能の開花、アーティストの世代交代を活性化させることにつながります。どの国でも同じだと思いますが、アーティストにとってはそう簡単にはいきません。若いアーティストは常に生き残りをかけて、作品の発表の場を得るために戦わなくてはなりません。しかし、才能を売り込む可能性はたくさんあります。国の文化政策が、アーティストが世に出る大きな手助けをしているわけです。

フランスは伝統的に受容と交流の国です。フランスに世界中からアーティストが集まることは、驚くことではありません。フランスのアーティストもまた、頻りに海外へと出て行きます。例えば、日本には、フランス政府公式文化機関があります。そのひとつである福岡の九州日仏学館は、定期的にフランスのアーティストを受け入れ、日本のアーティストとの交流の場となる役割を果たしています。日本は多くのフランス人アーティストを魅了する国のひとつなのです。」

—フランスは、映画保護に関する予

算や文科省の予算が潤沢なことでは有名ですが、その基本的な考え方や代表的な取り組みについて教えてください。

館長 「一言で言ってしまうと、歴史的な背景があるのです。16世紀以来、いやもっとその前から芸術家たちは国家の恩恵を受けていました。この答えではちょっと物足りませんね。では、具体的にお答えしましょう。フランスでは映画チケットに課税されているので、観客が映画界の財政の一部を負担しているという仕組みになっています。それは、製作者への援助資金となります。舞台芸術（演劇、音楽、ダンス）、デジタル・アート、文学に関しては、フランス文化・コミュニケーション省と地方自治体（市、県、地域圏）が、文化政策を支援しています。「文化」は当然のようにフランス社会の重要な要素となっているのです。

文化を自国の財産として大事にする。言葉にすると簡単なようですが、難しいですね。文化とは、表面に現れた様式ではなく、国民性そのものなので、その視点から日本を見直すことも必要なかもしれませんね。ガルニエ館長には、これからも色々教えてくださいたく予定です。

今後のイベント

展覧会

轟音と静寂の後
会期11月5日(土)~19日(土)
風景写真家ティエリー・ジラルールが3.11後の仙台を写したパネル24点を展示します。

線による試行 vol.2 追憶の風景より
11月26日(土)~12月17日(土)
神園宏彰の抽象絵画展。無意識、身体性、痕跡がテーマになった作品群です。

九州日仏学館

〒810-0041 福岡市中央区大名2-12-6
TEL 092-712-0904 FAX 092-712-0916
mail info@ifj-kyushu.org
http://www.ifj-kyushu.org

講演会

大参事を伝える人
日時11月11日(金)19:00
『ユダヤ人大虐殺の証人ヤン・カルスキ』の著者ヤニック・エネルによる講演。ヨーロッパ史の影について語ります。

文化は戦いの中に
日時11月16日(水)19:00
フランス人ジャーナリスト、フレデリック・マルテルの研究「私達は世界的な文化戦争に突入したか」を長年の調査を元に解説します。

